

いにしえの小川

- 賀茂御祖神社の調査 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 下鴨神社は、正式名称を「^{か も み おやじんじや}賀茂御祖神社」といいます。^{か も たけつめのみこと たまよりひめのみこと}賀茂建角身命と玉依媛命を祭神として祀り、『^{まつ えん ぎ しきじんみょうちよう}延喜式神名帳』に記載された長い歴史をもつ、格式の高い社です。高野川と賀茂川が合流する三角地帯に立地し、境内は^{ただす もり}糺の森と呼ばれ、今も古来より続く^{しやえう}社叢の風景が大切に守られています。

境内を2本の川が南北に流れていて、西側のものは^{せみ}瀬見の小川、東側のものは泉川といえます。そして、本殿南東にある^{みたらしのやしろ}御手洗社より流れ出る御手洗川が、^{ふなしま}舩島南側で泉川の支流と合流する付近から名前が変わります。これを「奈良の小川」といい、川は途中で流れを南西に向け、参道の下を潜って瀬見の小川と合流します。いずれの川も、いにしえより境内を流下していた有名な川でした(図1)。

下鴨神社に伝わる時代の異なる2枚の古絵図を比較すると、現在



図1 境内と川の位置



写真1 平成13年度調査で見つかった旧奈良の小川(東から)

の奈良の小川は江戸時代に付け替えられたもので、それ以前の旧奈良の小川は異なる場所にあったことがわかっています。また、史跡整備のための試掘調査でも、現在の川から南へ約12mの位置で旧奈良の小川が確認されていました。この結果を踏まえて平成12・13年度に発掘調査を行なうこととなりました。

調査の成果 旧奈良の小川の成

立時期は平安時代後期以前で、ほぼ東西方向に直線的に流れる人工の川であったことが判明しました。全長は約66m、川幅2.5~3m、深さは平均0.4mの素掘りで、護岸はされていなかったようです(写真1)。川底は高低差がほとんどなく、泉川から給水された水は緩やかに流れ、現在の合流地点の南側で瀬見の小川に流れ込んでいました。川には滞留した痕跡が認



写真2 出土遺物（左から平安時代後期の銭貨、江戸時代の鏡と鈴）

められず、遺物はわずかししか出土していません。

その数少ない出土遺物には、平安時代から江戸時代の土師器皿の他に、平安時代後期の銭貨や江戸時代の鏡・紡錘車形土製品・鈴などの祭祀に使用したとみられるものが含まれていました（写真2）。この他に試掘調査では、江戸時代の層から、2枚の大型土師器皿に刀状の鉄製品を挟んだものも発見されています。

下鴨神社所蔵の寛文年間（1661～1672）頃の境内の様子を描いたとみられる『下賀茂境内之絵図』（寛文古図）の奈良の小川は、すでに現位置に移し替えられていること、出土した遺物に17世紀中葉のものが含まれていることから、最終的に埋められたのは江戸時代前期中頃と考えられます。また、

この小川両岸からは、平安時代後期から桃山時代に造られた石敷遺構や集石遺構、石組などが発見されています（図2）。

祭祀の様子 それでは、奈良の小川と周辺の遺構で、どのような祭祀が行なわれていたのでしょうか。『新古今和歌集』の撰者の一人であった藤原家隆は、この小川を題材にして「風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」と詠っています。「みそぎ」という言葉が示すように、葵祭の斎王代が御手洗川で行なう「禊の儀」のようなお祓いが行なわれていたのかもしれませんが。また、『年中行事絵巻』巻二「賀茂川原の禊祓」には、川岸近くに建てられた幔（幕）が描かれていて、この目隠しの中で神社に入る際の禊やお祓いを行っていたとされ

ています。また、小川の岸で見つかった遺構は、このような祭祀に関連した建物などの痕跡の可能性もあります。

おわりに 湧水や井戸から流れ出る清い水は、穢れを洗い流すものとして崇拝の対象となることもあり、平安京の人々にとっては最も身近な賀茂川がその役割を担ったようです。賀茂川の潔斎の場としての利用は平安時代前期からすでに行なわれていて、旧奈良の小川は清めを行なった賀茂川に見立てられて境内に造られたものとも考えられます。小川から遺物がほとんど出土しなかった理由は、常に清浄に保つための努力が払われていたからではないでしょうか。そして、この努力は今も奈良の小川に脈々と受け継がれています。

（近藤 奈央）

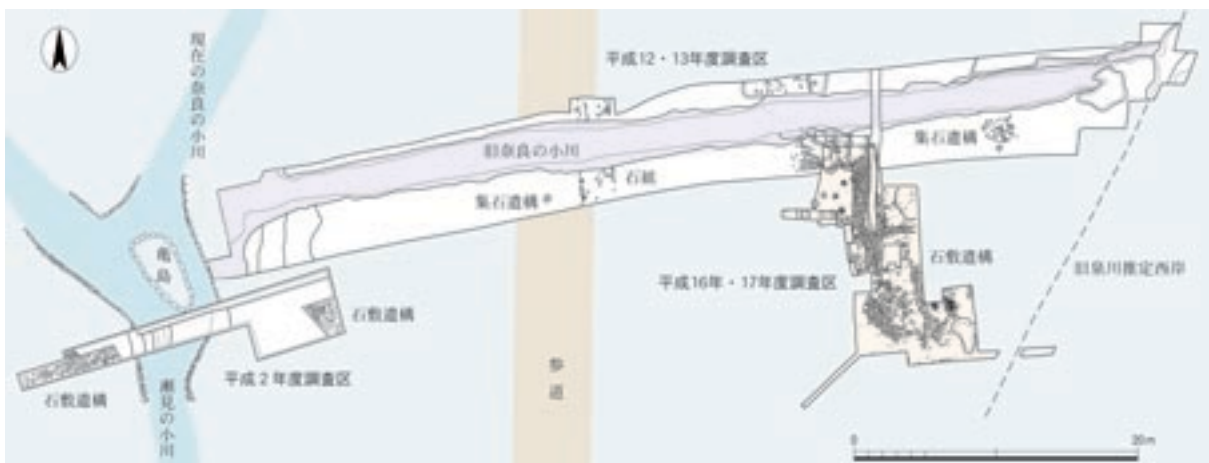


図2 旧奈良の小川周辺の調査区